A Life of Creative Process

ミウッチャ・プラダを駆り立てる生涯のモチベーションとは。

プラダ社の単独デザイナーとしては残すところひと月となった頃に行ったミウッチャ・プラダとの歴史的インタビュー。
ファッション界をリードする彼女を未来へと押し進めるものは何か、女性のエンパワーメントや
最新コレクションで表現した女性らしさとは……などを、率直な言葉で語ってくれた。

Portrait Photo: Brigitte Lacombe　Interview & Text: Sarah Mower　Editor: Saori Masuda

2020年2月21日。ミウッチャ・プラダのオフィスに足を踏み入れた私は、これから行うインタビューが歴史的なものになろうとは、予想もしていなかった。偶然か宿命か――ただ形容しがたい何かに導かれて、ファッション界、世界、そしてミウッチャ自身にとって尋常ならざる時期に彼女の心の戸口に立ったのである。このタイミングのおかげで、当日の日付は私の脳裏に永遠に刻まれた。2日後には、ラフ・シモンズを共同クリエイティブ ディレクターに迎えるという革命的な一歩にして世界を震撼させる前代未聞の革新的出来事が発表されることとなる。そして、コロナウイルス危機……。

つまり、このインタビューは、自ら35年間にわたって築き上げ、その驚異的な才能を土台に成長を遂げた世界的企業にしてメゾンの単独デザイナーとしてミウッチャ・プラダが行う事実上最後のインタビューとなる運命にあったのだ。その内容は、ミュウミュウやミラノにある巨大な現代美術の複合施設「プラダ財団」から、彼女が企画したあらゆる文化的プログラム、そして彼女がファッション界にもたらす多大なる影響力にまで及んでいる。ミウッチャを訪問したのは、ミラノ本社で最後の単独ショーとなるウィメンズのショーが発表された翌日のこと。まさに、記憶に鮮やかに残る体験だった。客席から見下ろすのは、階下に沈んだ中庭2つを行き交う女性たち。彼女たちはテイラードジャケットやフリンジスカートをまとっている。まるで闘技場で観覧しているようで、私の目に女性たちは剣闘士のように映った。その後、バックステージでレポーターの群れに囲まれたミウッチャによる次の言葉をとらえた。

「女性らしさとは何か、さらなる力強さとは何かといった問題に対峙する女性たち。本来、女性らしさは、それ自体強みになりうるという考えを提起しました。女性らしさを忘れる必要はありません。私が普段は苦手としている性的な魅力を、一つの道具として用いたのです」

今回のインタビューが特別な機会となるであろうことは、あらかじめ承知している。最近、ミウッチャがジャーナリストと一対一でインタビューを受けることは滅多にないからだ。ともあれ、私はインタビューが実現しないのではないかと気を揉んだ。と言うのも、5月に日本でクルーズショーを開催することを理由にこの申し入れを受けてくれたのに、当のショーがコロナウイルスの影響で中止になってしまったからだ。ところが、寛大にもミウッチャは予定通りに進める意向を示し、プラダ本社にある白を基調としたミニマルでインダストリアルな雰囲気のオフィスに私を招き入れ、長い亜鉛製のミーティングテーブルを挟んで1時間にわたって驚くべき会話を繰り広げてくれた。

早春のイタリアの陽光が降り注ぐなか、ミウッチャは仕事用の制服とも言うべきペールブルーのシャツに飾り気のないネイビーのカシミアセーター、そして細身のクロップドパンツに身を包んでいた。セーターの首まわりを飾るのは、巨大なダイヤモンドをちりばめたヴィンテージのアールデコ調ネックレスで、公職の要人が正装時に着用する首飾り並みに大ぶりの壮麗な一品を、ミウッチャらしくカジュアルに着こなしている。幸福感と未来への明るい期待ばかりが感じられるはずの光景である。しかし、実際には世界は新たな現実によって急速に侵されつつあった。日本と中国にいるヴォーグ編集部の同僚たちは、早くも海外との行き来がままならない状況にある。ミウッチャに、クルーズショーはどうするつもりか尋ねると、「日本の社長は知識人と親交が深いので、多くの場所でさまざまな体験をするつもりだったのよ。ショーの後に、あまり知られていない穴場をめぐろうと思って。具体的な場所については、延期してしまったこともあるし、明かさないほうがいいのかしら」と答えが返ってきた。「半年後になるかもしれないけど、このウイルスの今後の展開次第ね」

それからミウッチャは、窓に目を向け、その後も繰り返し私の頭をよぎることとなる言葉を放った。「今日、ミラノ郊外の小さな街で感染者1人が確認されたとの報道があったのよ」。彼女が心配そうにしていたのも、無理はない。これこそが、その後ウイルスによってロンバルディア州が破壊されることを示す初の兆候だったのである。その日から4週間と経たずに、ミウッチャと夫パトリッツィオ・ベルテッリはプラダの力を活用して国の緊急事態に立ち向かうべく行動を起こし、ミラノ市内各地の病院に呼吸器集中治療ユニットを6台寄付した。さらに、プラダは医療従事者に配布する医療用全身防護服8万着とマスク11万枚の生産を開始したという。

これには、誰もが意表を突かれたことだろう。しかし、常に世界情勢を気にかけてきた女性の責任感あふれる性格がうかがえる出来事である。さて、このように奇妙な過渡期にあって、ミウッチャは真剣に、注意深く耳を傾け、時折、話を中断して的確な英語の表現を探しながらインタビューに応じてくれた。最初に話題に上ったのは、長年にわたり日本に関心を寄せ続けることとなったきっかけである。

ミウッチャ・プラダと日本を繋いだきっかけとは。

「昔から、日本文学を通じて日本文化に強く惹かれていました。いつの時代でも高く評価されている作家の紫式部による名作『源氏物語』を読み、色彩や花々、そして一つ一つの仕草に込められた意味に、すっかり魅了されたのです。私には、そのような伝統は非常に興味深いものに思えました。三島はもちろん、とにかく多くの作家の作品を読みました。こうして、私は本を通じて日本文化を好きになったのです」

先日、ミウッチャはロンドンのデザイン・ミュージアムで開催予定の回顧展に備え、自らのアーカイブを振り返り、数年分もの作品を見返したと言う。「2013年春夏コレクションは、日本の花々をテーマにしたもの」だとか。ヘルツォーク&ド・ムーロンに設計を依頼した壮麗なる青山エピセンター・ストアが2003年に完成してからというもの、ミウッチャと東京、そして日本文化を繋ぐ無数の糸は、密に編み合わされてきた。東京のエピセンター・ストアから出発した2004年の巡回展「ウェイスト・ダウン」は、スカートをはく楽しさや歓びをテーマにした内容で、エキシビションとショッピングのコンセプトの融合

2020年2月20日に開催されたプラダのショー会場。2つ並んだ箱庭のようなランウェイの中央には、世界を両肩で支えるアトラスをコンセプトにしたトリックアートが置かれていた。

Photos: Courtesy of Prada

を狙ったミウッチャによる初の「実験」である。

一方、ミウッチャが例に挙げる事柄は、いずれも、はるか昔の少女時代にまで遡る日本文化との長い関係性にまつわるものである。ふと何かを思い出して、彼女は笑った。「そう言えば、下駄を履いていたこともあったわ。騒々しく下駄を鳴らして、ミラノの街を歩き回ったりしてね！」

共にひとときを過ごすなかで、我らの時代における最も偉大な女性の思想的指導者が、生涯のモチベーションや、知識に関する緻密で問いに満ちた探求、そして自らが女性に向けるメッセージについて、個人的に、深く掘り下げながら、力強く語ろうとする姿を目の当たりにして、私は感銘を受けた。後に、近々ラフ・シモンズに関する報道が出ると教えてくれなかったことを不可解に思いもした。報道が出るまで口外しないよう、私に機密保持契約を締結させればよかったではないか。しかし、今は、そうしないでくれて良かったと思っている。おかげで、私たちの会話は彼女に関することに終始する内容となった。何よりも私の頭に深く刻まれたのは、「今こそ、意義あることに価値を置くべき」という彼女の言葉である。

プラダのコレクションの「意味」するところをひもとく作業は、なかなかデリケートだ。とは言え、実のところ、その意味は明白――衣服とは、社会のあらゆる物事を運ぶ装置であり、社会こそが、ミウッチャがプレイの場とする広々と開けたフィールドなのである。秋冬コレクションのセットの壁は、ウィーン分離派を思わせる花柄の壁紙で覆われていた。「当時は、芸術家や職人、労働者、知識人が一丸となって、良きものを生み出

2020FW

していた時代でした」

このメッセージは、大量生産と過剰消費の時代に生きる私たちの心を鋭く打つ。「私の主な関心事は、創造性と手工業の連携。そして、職人技の価値設定。職人の情熱や手仕事が、くだらない芸術よりはるかに勝っていることだってあるのよ」とミウッチャは、きらりと目を光らせる。そして、「19世紀におけるアーツ・アンド・クラフツ運動は、ぞんざいな物づくりを行う工業化への抗議でした。現在の私も、きっと何かに対して抗議しているんでしょうね。出来の良し悪しなど、誰も気にしていないってことに」と笑う。

「基本的に、私は無知に対して批判的」。

ここでミウッチャは言葉を切ると、じっと私の目を見てこう言った。「基本的に、私は無知に対して批判的。反対に、文化や品質、教養は大切。ところが、人々に耳を傾けさせるには、それらを魅力的に表現しなければ！　要するに、それが私の仕事なのです」。どうか、ミウッチャ・プラダが四六時中、厳しく政治思想を説く伝道師だと早合点して、逃げ出さないでほしい。彼女の素晴らしいところ、そして彼女自身にとっても素晴らしいことは、遊び心をもってさまざまな発想や衣服を楽しんだり、複数のシンボルを一つにまとめるような知的な飛躍を楽しんだりできる点なのである。ショー会場のセットの中央には、あるトリックアートが設えられていた。切り出した板を組み合わせたような像を台座に据えたもので、一見すると世界を両肩で支えるアトラスをコンセプトにした彫像に見える。「では、世界を支えているのは誰なのかしら？　この人物は、男性ではありません」とミウッチャは、くすくす笑う。「非常に抽象的な像ではあるものの、胸らしきものもあります。皆、中心で世界を支えているのは男性で、フリンジ（周縁）にいるのが女性だというふりをしています。でも……私たちが周縁にいながらにして、同時に世界を支えている可能性もあるのでは？」

ミウッチャにとって、「フリンジ」はフェミニニティ（＝女性性）の象徴だと言う。「透明性、フリンジ、繊細さ。私は、女性らしさを、一つの価値として検討する境地にたどり着きました。単なる男性のための娯楽ではなく！」。女性のエンパワーメント、そして自分らしく自己表現を行えるよう女性を解放する方法を模索するミウッチャのさりげなくも激しい闘いは、彼女の心の奥深くに根差している。では、現在の女性の社会的立場とはどのようなものなのだろう。昔と比べて、何が変わったのだろうか。「私たちは、それほど前進していない気がします。未だに、その理由を考えているところ。個人的には、恐怖に満ちた長い歴史があること、そして男性よりも身体的に弱いことが理由だと思っています。DNAに刻まれているのかしらね。また、子どものこともある。子どもたちを守るために口を閉ざす、そうやって何世紀にもわたって口を閉ざしてきたのです」

ここで、ミウッチャは「Me too」運動が始まった頃に発表され、その問題を真っ先に取り上げた2018年春夏コレクションに触れ、かつて、こんな時代もあったと思いをめぐらせた。「夜間に、女性が裸同然の格好でひとり気ままに出歩いても、誰も気にしなかった。ところが、なぜか私たちは

ますます体を隠すようになっています。60年代は、皆、ミニスカートやシースルーのトップスなどを着て半裸同然で外出していたのに。現在では、とても無理でしょう」。さらに、新作コレクションではパワードレッシングについて考察している。今回も、彼女が重要視しているのは、常に知性で自らを武装すること、そして女性らしさが二面的な力である事実。「男性のようなパワードレッシングを行うのは、たやすい。でも、私が興味があるのは、いかに女性らしさを力強さに変えるか。なぜ、女性は社内会議にセクシーな格好をして出席してはいけないの？ 賢く、男性より知識があって、自分の考えに自信があるなら、極端な話、裸のような格好で出席したっていいはずよ」

ミウッチャは、自らの人生経験を通じて、どんな人が相手であれ自分の声で主張することが大切なのだと、若い女性に教えたいと言う。「私は、幼い頃から賢く教養のある知的な人々に囲まれて育ちました。最初の頃は、いつも黙っていたわ。何を言えばいいのかわからなかったから。そこで、勉強や読書、映画鑑賞を通じて、少しずつ知識を蓄えていったのです。知識が増えれば増えるほど、話せるようになりました。今では、すごくお喋りよ！」と大きな笑い声を上げ、次のように続けた。「うちに若い女の子が来ると、こんな話をすることもあります。21歳のあなたが、すごくセクシーな格好をしてディナーに出かけたとして、誰よりも政治や文学、芸術、サッカーに詳しかったとしたら？ あなたの教養の豊かさに、皆、衝撃を受けるわよ。その夜は、女王様のように崇められること間違いなし！」

これは、ミウッチャが若い女性に心得てほしいと切望する重要なメッセージであり、若い女性向けのトークショーや集いの場を持つブランドとしてミュウミュウを構想した理由でもある。「若い女性を引き付けるからには、より得るものの多いブランドにする方法を見出したい――文化的な意味で得るものが多いという意味でね！」

ミウッチャ・プラダを未来へと押し進める原動力とは。

では、次に考えていることは？ ラフ・シモンズの加入に伴う変化を迎えようとする今、ミウッチャは、よりクリエイティブな挑戦、両者の間により多くの火花が飛び交い、共に新たな発想を生み出す楽しさに火がつくことを心待ちにしている。一方、息子ロレンツォ・ベルテッリは、マーケティングとコミュニケーション部門を率いるなかで、持続可能性の実現に向けたあらゆる改善に取り組んでいる。「リナイロン」プロジェクトの責任者も務め、第1弾として再生ナイロン製のバッグからなるカプセルコレクションを発表。現在は、2021年以降、プラダのすべてのナイロン生地に、持続可能な資源を原料とした糸を使用するという誓いの実現に向けて動いている。また、プラダは毛皮の使用も廃止した。「おかげで、創造力が高まったわよ！」。こう言って、ミウッチャは、新作コレクションのコートを指さした。一見毛皮のようだが、「実は、シアリング製。美しく見せる方法を考えなければならないので、独創的なアイデアがたくさんひらめいたわ。美しいハンドペイントを施す方法を考えねばなりませんでした。将来、さらに進化するために、さまざまな研究をしているところよ」。

そろそろ時間だ。最後の質問。未来を考えたときに、今後も変わらず自分をわくわくさせるものとは何だと思う？「唯一興味があるのは、学ぶこと。もはや、なんでも好きな服を着るわけにもいかないし、スポーツや娯楽を楽しむ機会も減るし、年齢を考えると恋愛を楽しむ時期も……」と笑いながら、「おしまいかしらね。そもそも、私は若い頃から、学ぶことによって他人より優位に立ちたいと考えていました。それが自分の糧になったし、社会と関わっていたかったから。今は、そこを新たに開拓したい。プラダ財団でも、意義のあることに関するエキシビションを行いたいと考えています」。

ミウッチャは、驚異的な力を持つ人物であり、その影響力はファッション界を超え、はるか先にまで及ぶ。それが事実であることは、この数カ月の間にさまざまな形で証明されている。「重要なのは、目的を持つこと」。ミウッチャは、インタビューを次のように締めくくった。「夢を見ることに興味はない。実現できる夢が好き。何かを考えたら、それを実現させたい。世界が大変な状況になっている今だからこそ、実用性、そして答えに焦点を当てるべきなのです」

Miuccia Prada

ミラノ生まれ。国立ミラノ大学にて政治学の学位を取得後、1913年に祖父のマリオ・プラダが創業したプラダ社でアクセサリーデザインを始める。70年代後半パトリッツィオ・ベルテッリとの出会いにより世界的な展開を促進させる。2人の息子がいる。2004年、CFDA国際賞受賞、2005年、タイム誌の「世界で最も影響力のある100人」選出、2012年The Metで「スキャパレリとプラダ」展開催などその影響力は多大。

Photo: Gonzalez.com, Courtesy of Prada (Black Jacket and Black Knit Look)

Miuccia Prada interview Japan Vogue 01.06.2020

When I walked into Miuccia Prada's office on 21 February 2020, I had no idea that she would be giving me an historic interview. Chance, fate – I don't know how to describe it – had taken me to her door in extraordinary times for fashion, the world, and Miuccia Prada herself. The timing of it has etched that date into my mind forever. Two days later, she was about announce her revolutionary move of bringing in Raf Simons as her co- creative director at Prada- a seismic, unheard-of innovation. And then, there was the coronavirus crisis.

What it means is that the interview you read here was destined to be the last that Miuccia Prada gave as the sole designer at the house she has built over thirtyfive years since this giant global corporation as been grown on the formidable strength of her talent. It contains Miu Miu, the huge contemporary art museum complex which is Fondazione Prada in Milan, all the cultural programmes she has developed; all the massive influence she weilds over fashion. I went to see her the day after her women's show at her Milan headquarters – her last solo show. That experience was something to remember vividly: We had sat, looking down as women passed to and fro through two sunken courtyards below. They were wearing, tailored jackets and slashed skirts. To me, they looked almost gladiatorial – it was almost like spectating on a public arena. I caught what she said as she was surrounded by a swarm of reporters backstage.

" Women confronting what is feminine and what is more powerful. It's a discussion about how femininity intrinsically can be a strength of its own. We don't have to forget it" she said. " I'm using glamour – which I normally don't like- as an instrument."

I already knew that this interview would be a special occasion, because Miuccia rarely gives one-to-one time to journalists these days. Nevertheless, I worried that it might not happen, because the cruise show planned for in Japan in May (check?) had been called off because of the coronavirus, and originally, that was the reason for her granting me access. But No! Generously, Miuccia wanted to go ahead, welcoming me into her spare, industrial white-minimalist office at Prada headquarters to sit opposite her at the long zinc meeting table for an hour of incredible conversation.

The early Italian spring sun was streaming down on us. She was wearing her uniform du jour – a pale blue shirt, plain navy cashmere sweater and narrow cropped pants. An enormous diamond vintage art-deco necklace, almost the size of a Mayoral chain was draped over her sweater – grandeur worn with her typical casualness. Everything should have felt happy and optimistic – but a

new reality was fast encroaching; my Vogue colleagues in Japan, and from China were already in lockdown. I asked what she was going to do with her cruise show. " We were planning to make an experience in many places, because our president in Japan is very connected to the intelligentsia, so we were going to places which are not so known, to visit places after the show. I don't know if I can say where", she said, " Because we have postponed it. Maybe we will do it in six months, possibly, but we don't know how this sickness will evolve."

Then she looked towards the window and mentioned something which will haunt me. " The news of today is there's a case in a little town outside Milan". She looked concerned, and rightly: this was the first sign that Lombardy was about to be ravaged by the virus. But within four weeks, she and her husband Patrizio Bertelli had reacted by utilizing the power of Prada to fight the public emergency, donating six respiratory intensive care units to hospitals around Milan. and Prada started the production of 80,000 medical overalls and 110,000 masks to be allocated to healthcare personnel.

Nobody could have forseen that – but it is testament to the responsible character of a woman who has always held world affairs in mind. Back in that strange in - between time, she was serious, attentive, pausing occasionally to find precise expression in English, and she started by explaining her long-standing interest in Japan had come about. " I was always very attracted to the culture, through literature. I read masterpiece The Tale of Gengi, by acclaimed writer Lady Murasaki Shikibu – and I got immersed, in the idea of colors, the flowers, in how much every single gesture has a significance. That tradition is very interesting to me. And Mishima of course. Many, many writers. So I came to love Japanese culture through books."

Recently, she's been going through her archive, looking through years of work for a retrospective which is planned for the Design Museum in London. " There's one collection, Spring 2013, which is specifically about Japanese flowers", she said. Since she commissioned Herzog & DeMeuron to design her spectacular "Epicenter" store in Ayoma in 2003, the strands of her relationship with Tokyo and Japanese culture have become closely interwoven. The Tokyo Epicenter was the launch pad for the delightful 2004 exhibition, Waist Down, about the fun and sensation of wearing skirts ~~and shoes~~ – which was her first " Experiment in merging the concepts of exhibition and shopping."

But the references she uses are bound up with a long relationship with Japanese culture which goes way back to her girlhood. She laughed at a memory that suddenly came back." I remember at one time, I was wearing Japanese Geta

shoes" she laughed. " Clattering along the streets of Milan making all that noise!"

In the time we spent together, it was amazing to find one of the greatest women thought-leaders of our times ready to speak personally, deeply and powerfully about her lifelong motivations, her subtle, questioning search for knowledge and her messages to women. I puzzled afterwards that she didn't tell me that Raf Simons news was about to break – she could have bound me to a non-disclosure contract until it was out. But I'm glad she did not, because what came out from our conversation was about her only. What stuck in my head above all is: " Now is the time to give value to what counts".

It is always a delicate business to unravel what Prada collections 'mean' – but really, it's obvious: clothes are the carriers of everything that's out there in society – and that is the wide-open field in which Miuccia plays. For fall, the walls of her set were papered in Viennese Secession-like flowers. " It was a moment when artists, craftspeople, workers and intellectuals were all together, creating something good."

That message for resonates pointedly in a time of mass-production and over-consumption . " Mainly now I'm very interested ~~now~~ in the association between creativity and craft. Valorising craftsmanship. Sometimes, the passion of these people, and the work they do, is much better than bad art", she said, her eyes flashing. " At the time of the arts & crafts movement in the 19th century, it was a protest against industrialisation that made everything ~~made~~ with less care. Now, I'm sure I'm protesting against something," she chuckles. " That no-one cares if something is well done, or horribly so".

Then she took a pause and looked me in the eye. " Basically I'm a critic of lack of knowledge - on the contrary, culture, quality and knowledge counts. But then, you have to make it attractive to make people listen! And that is basically my work." But don't run away with the idea that Miuccia Prada is a full-time stern preacher of politics. The delightful thing about her – to her - is that she has fun with ideas, fun with clothes, fun with making intellectual leaps that wrap two or three signs into one. There was a trick at the heart of her show-set – a cutout figure on a plinth which at first sight looked like a conceptual sculpture of Atlas, with the world on his shoulders. " But who is holding up the world? The figure is not a man", she chuckled. "It's a figure which is very abstract, it also has kind of breasts. People pretend that men are holding up the world, and we women are going out in fringes. Or – we go out in fringes, and we also hold the world."

“Fringes” to her symbolise femininity. “ Transparency, fringes, delicacy. I came to the point where I was investigating femininity as a value. Not just as entertainment for men!” Her subtle but fierce battle to empower women, and find ways to liberate us into our own ways of expressing ourselves is something which runs deep in her. I asked what she thinks about where we are, what has changed? “ I think we have not advanced so much. I’m still trying to understand why. I think it’s because we have such a long history of fear, because we are weaker physically. Probably we keep it in our DNA. And the other reason is because of children, we shut up to protect them, and we have shut up for so many centuries. ”

She references the collection she did for spring 2018 - when the Me Too campaign started - which tackled that issue head on. She imagined a time when “ Women can be free to go out more or less naked in the night, alone and no-one bothers. But by chance, we are more and more covered now. I remember in the Sixties when we went out basically naked, between mini-skirts, transparent tops and so on. Now, it’s impossible.” With her new collection, she’s moved on to thinking about power-dressing. The key, again, she believes, is to always ~~to~~ arm ourselves with our intelligence and the fact of our femininity as our dual power.“ To do power-dressing like men – that is easy. But what I am interested in is how to make powerful the feminine. I was thinking why shouldn’t a woman who goes to a corporate meeting, dress~~ing~~ super-sexy? For sure, if you are clever, if you have more knowledge than them, exaggerating you could show up kind of naked if you are sure in your ideas.”

She wants to use her own life experience to teach young women to be able to use their voices in any company. “When I was young, I grew up with a group of intellectual people, very clever and cultivated. And I was always silent. I didn’t know what to say. Little by little, by studying, reading, watching movies, knowing. The more I knew, the more I could talk. And now I talk a lot!” She laughed out loud. “ And sometimes when girls come to our house,I say to them what if you go out to a dinner when you are 21, dressed super-sexy - and you know much more about politics, literature, art, football than anyone? You will be ~~are~~ so knowledgable that people will be shocked. You are sure to be the queen of the evening!”

This is the key message she really wants young women to learn from. It’s why she has developed Miu Miu as brand with talks and gatherings for young women. “ Because it attracts young girls, I want to work out how to make it more profitable – profitable from a cultural point of view!

Now, what next? With the changes on the way with Raf Simons joining her, she looks forward to more creative challenge, more sparks flying between them to

ignite the fun of bringing out new ideas together. Meanwhile, her son Lorenzo Bertelli, as head of marketing and communication, is championing all sorts of progress on sustainability. He is in charge of the ReNylon project, first with a capsule collection of bags made from recycled nylon, which is now moving to a pledge that all Prada nylon will be made from sustainably-sourced yarn from 2021. Prada has also stopped using fur. “ And I must say, it has made us more creative!” She pointed to the coats in her new collection, which look like fur but “ They’re made of shearling, but they had to think about how to make them beautiful. It provoked a lot of creativity.We had to work out how to hand paint-them beautifully. So, we are researching so much, to be better in the future.”

Our time was running out. As she faces the future, I asked, what still excites her? “ The only thing I’m interested in is learning. I can’t dress as I would like any more, sport and fun is a bit less, because of age, the time of love” she laughed, “ Is maybe over. But even when I was young, I always wanted to compete with learning. For myself but also because I wanted to be relevant. Now that is the new frontier, even at the Fondazione Prada, I want to do exhibitions about things that matter.”

She is an incredible force, in fashion and way beyond. The last few months have proved that in every way. “ The point is to have purpose” she concluded. “I am not interested in dreaming. I like dreams that come true. If I think of something, I want something to happen. The world is so difficult, it is time to focus on usefulness. Answers.”